

柞乃杜

秩父神社社報
柞乃杜(ははそのもり)

第 28 号

平成15年12月3日
(大 祭)



文化財「大宮学校」の復活

世に云う「大宮学校」は、秩父最初の白亜の洋風校舎。明治十七年の十二月に竣工した、今から百十九年ほど昔のことです。

フランス公使が明治十五年に秩父を訪れて、秩父神社境内の粗末な校舎でフランス式算術を学ぶ児童たちに感動して、新校舎建設にと百円を寄付し、フランス人技師が設計した、当時は大評判のモダンな由緒ある文化財です。

明治十七年といえ、秩父唯一の地場産業の生系の価格が大暴落して郡内農家は借金に苦しみぬき、十一月には遂に「秩父事件」を起こしたほどでした。

それでも当時の先人たちは、郷土の人づくりこそ大事と何を措いても教育に力を注いだ。今の不況と人心の荒廢のさなか、われわれが深く学ぶべきところです。

そこで「大宮学校」をゆかりの土地に再建して社会教育の拠点とし、市民の自主運営で子供たちの健全育成に加わろうではありませんか。

われわれ大人たちが昔の子供に立ち返って、TVゲームや携帯電話に負けない手造りの遊びや郷土の文化を、今の子供たちに伝えることが町おこしの第一歩です。

解説

秩父神社 (27)

秩父市文化財保護審議委員

坂本 才一郎

◆ 旅は道づれ 世は力ネと鯛

昭和三十一年の例大祭も迫った寒い日に、市役所わきの市立図書館（旧大宮学校）から、突然の電話で申訳ありませんが、清水武甲先生をはじめ皆さんが御待ちでございますので、図書館までは是非とも御出かけ下さいませ。様との事であつた。身支度を整え、自転車をとばして図書館につくとストロブを真つ赤にして迎えてくれた。

清水先生が同席の観光課の浅見清一郎君と図書館司書の大河原正見君を紹介してくれた。つづいて坂本さんは高篠村民であるが、合併することで市議会は議決しているの、吾々は秩父市民として接しますからといわれ、一階級あがつた様な気分になった。しばらく雑談に花が咲き、清水先生にうながされて全国曳山の現況について浅見清一郎君が発言した。「秩父の屋台や鉦も国の指定をうけないと修理も至難となり、木部は継続事業として施工しても幕までは不可能です。高岡の御車山の担当課長である伊勢宗治氏は全国の曳山調査をしています。秩父もおくれな

い様いますぐにでも着手すべきです。秩父の屋台や鉦に関係ある曳山は五十個所位です。」その特徴等は浅見君でできるが、曳山の構造や装飾と特徴などは私にはできないといっている。秩父のため坂本さんより人がいないのでお願いしますといわれ、秩父の屋台や鉦には先祖が世話になつていたので、やりますと返事をした。それに調査費用は個人負担とし、調査地・調査日・地元教委への連絡・費用概算は浅見君が五日前に坂本に電話すること、清水・大河原君も了承し、全国の曳山調査は開始したのである。

今年の十一月十日、十一日と新潟の村上市と福島田島町の文化



財を秩父市文化財委員一行と共に見学したが、村上市は私にとつて忘れられない所である。上野で新潟の列車にのり村上についたのが夜の一時頃で旅館でも玄關は消灯せず私達を迎えてくれた。「明朝十時にお迎えにきますという電話がありました」と旅館でいう。浅見君が「いびき」をかくかもしれないが、百雷の「いびき」が子守歌かといつて寝てしまった。翌朝浅見君が階下の食事を用意した部屋に行つたが、また上つてきて考えこんでいる。私に階下の食事室に行けと小声でいうので行つて驚いた。二人の膳の前に一尺もある大きな鯛が一匹ずつのつてゐる。秩父の山つ子へ御馳走してくれるのかとも思えるが、

浅見君は旅館の代金を聞き間違えたかと心配している様子である。「浅見君、持ってきた金で足りなかつたら二人の時計でも質屋へやればなんとかなるよ」と元気づけた。食事をすまして役所の人が見えたので、カメラと筆記用具を持つて街に出て神社を参拝したが、広い境内で露店がいっぱい。鯛の塩焼きを売る店が何軒もあり、塩が少ないので遠方へ送れないとの事。しかし一尺の鯛も無事体内で消化中、浅見君も私も笑顔で調査についたというわけである。

屋台・笠鉦の国指定有形民俗文化財のお話は、次号へ続くとする。



カザフスタン世界伝統宗教指導者会議・提言要旨

日本の神道と霊的生命観

宮司 藺田 稔

共同体の宗教文化

宗教についての近代西欧的な常識からすると、日本には古来奇妙な宗教文化の伝統がある。それは、西暦6世紀に仏教が伝来して以来、神道という土着宗教と仏教という外来宗教とが「神仏習合」という一種の宗教複合を構成しながら、しかも互いにそれぞれの個性性を尊重してきたという、いわば共存の伝統である。その歴史的原因の一つは、神道が元来、稲作文化に芽生えた素朴な自然宗教であったこと、その二つには、伝来した仏教もまた既に多数の如來諸菩薩と護法神から成る複合的な大乘仏教であったということがある。神道が先在する自然神と祖先神から成る素朴な土着崇拜であり、仏教が深遠な思想と行法を備える洗練された成立宗教であるにしても、いずれも排他的でない寛容な多神教であったことが、その後の日本宗教史を特徴づける両教共存の伝統であったといえよう。

こうして日本では、おもに神道と仏教という複数の宗教が同一の共同体のなかに共存し複合することができるといふ伝統的傾向が未だに消滅していないが、その根本的理由の一つに、元来日本人の信仰が個人を主体とするよりも強く共同体を単位に営まれてきたという宗教文化の特徴がまず挙げられよう。

日本には古代から血縁の共同体と、中世から農民のあいだに発達した地縁の共同体とが歴史を通じて強固に存続し、この両者が一種の共同体宗教を根強く営んできた。かくして日本における神道と仏教とは、それぞれ単一の排他的信仰として個人なり



共同体なりを独占してきたのではなく、同一の共同体の内部でその宗教文化を相補的に分担してきた。したがって日本の社会には、排他的な宗教集団として神道村とか仏教村という宗教共同体も存在しなければ、神道氏族とか仏教氏族といった宗教別の血縁集団も存在しなかった。だからこそ、神仏習合という一種の宗教複合も共同体宗教として十分に成立可能であったのである。

日本の霊的生命観

近代の著名な俳人のひとり高浜虚子(明治7年〜昭和33年)の名句に、

ものの芽の ひとつひとつに 春の神

というのがある。「待ちわびた春の季節がいよいよ近づいたのか、庭の枯れた木々の枝や草叢をよく見ると、もうこんなに新芽がふくらんでいる。まるでその一つ一つに若々しい生命を育む春の神が宿っているようだ」という意味であろう。そこには、長い冬を耐えて草木がいつせいに芽ぶき出した、その小さくとも確かな春の誕生に驚き喜びながらも、その神秘さに心を打たれて思わず「神霊が宿る」と讃えた、繊細な日本人らしい宗教感覚が見事に表現されている。熊野那智の幽すいな滝をそのまま菩薩(千手観世音菩薩)の姿として霊場とし、比叡山や高野山の峰々の神秘なたずまいを自然のままに曼荼羅の理想世界とするなど、自然の豊かな景物がそのまま悉皆成仏の霊的世界とみなすのも、虚子の名句に見るような、万物に生命の霊が宿るといふアニミズム的な土着の世界観とあいまってこそその宗教文化であったといえよう。

伝統的な日本宗教は、このようにして自然と人事を問わず万事に人知を超えた見えない生命の霊的な働きを直感し、それを力ミともホトケともして畏敬してきた。春の芽吹きに力ミの宿りを感じ、山川草木の豊かな大自然のたたずまいに仏菩薩の世界や力ミともホトケともいう死者や先祖の霊が

鎮まる他界を構想してきた。しかも日本宗教本来の生命観とは、人間を含む大自然の森羅万象の生命現象である。人間ばかりか動植物が生死をくりかえして子孫に伝えられるものが生命であって、それをカミともホトケともする神秘的な霊性のはたらきとして畏敬するのが、そもその基本的生命観である。そこには、現に生きている人間だけが生存権を独占するような現代の世俗的生命観は見当らない。生者は死を免れないが、だからこそ個体の生死を超えて子孫に伝えられるのが他ならぬ生命である。そこに、人知の及ばぬ生命の神秘を畏敬して見えない霊のはたらきを感得する。神仏の観念は、この生命畏敬の宗教的表現にほかならない。

生命尊重の文明

現代は、特に生命科学のめざましい発達によって、この地球全体がほぼ35億年の昔から壮大な生命連鎖の体系であることが明らかにされるに至った。主に太陽エネルギーを吸収して地球上の大地と海と大地とが微妙なバランスを保って、あらゆる生物が遺伝子を共有しながら生かされる生態系を成していることが明らかにになったのである。この長い生態系の歴史のなかで、人類はわずか200万年の生存にすぎないこともわかってきた。ところが、生物の小さな仲間ではない人類が、この近々100年のあいだに地球資源を私物化して乱用し、ついには地球全体の生態系を破壊する深刻な環境問題を引き起こしてしまっただけでなく、国際的な環境保全の対策が各方面で始まってはいるが、それを徹底して進めるためにも現代を支配する物質主義の文明を軌道修正して、ぜひとも生命尊重の文明を実現する必要がある。地上の全生命の繁栄と共生こそが、その一員の人類の生存をも可能にする。その意味からも、小さな春の若芽も見過ぎぬような生命あるものへの自覚とその霊性への畏敬をめざして、諸宗教が相互理解と相互



協力することが喫緊の課題であろう。

（「結び 宗教と寛容の課題」中略）

われわれ人間は、地上の全生物と等しく生命存在である。だが、その生命連鎖の神秘に目覚め、そこに自己超越の尊い霊性を見出したのも他ならぬ人間である。人間として生命の尊厳を保つためにも、全生命に連なる霊性への畏敬を共にすべきであろう。

【表紙絵解説】



力に関するコメントを戴きましたので、ご紹介致します。

この作品は、秩父神社附属神代神楽・第七座「天岩屋戸開き」の中で、天鈿女命が一心不乱に舞っている一場面です。実は私も秩父神社の神楽保存会の一員であり、この舞を舞うことがあります。

天鈿女命の面をつけ、装束に身を包むと私がその神様になったような気がしてくるから不思議でなりません。しかし面をつけての激しい動きをする時は、息が切れて大変ですが、その神様に近づこうと一生懸命に務めて舞っております。

また、こうした神楽の魅力の一つに、神々の様々な表情をもつ面のおもしろさや、狩衣の模様の美しさ等も挙げられます。

この作品は、昨年度新井様が所属する全国公募団体「蒼騎会」の第四十二回蒼騎展で、見事「蒼騎会賞」を受賞されました。神楽芸能と絵画芸術という両面を熟知しておられる新井様の益々のご活躍を期待致します。

社団法人秩父宮會事業報告

本年は秩父宮雍仁親王殿下のご生誕より百年、また秩父宮家のご創立より八十年、そして親王殿下が薨去されてより五十年の節目の年に当たることなどから、かつて昭和三年九月二十八日の両殿下のご成婚を祝い、永く後世にまで記念する事を目的に出版された『秩父宮殿下と勢津子姫』（非売品の限定出版物）が、装いも新たに復刻刊行されました。

そもそも「秩父宮」の宮号は、遙か太古の時代、景行天皇の第二皇子であった倭建命が、東国遠征の帰途に豊かな事跡伝承を残されたという古い神話と、また皇居の



西北遙かに乾の方角を制する武蔵国の名山にして首都をうるおす荒川の源流を成す秩父山塊に由来するもので、当時の秩父郡民は狂喜してこの慶事を奉祝したことが伝えられています。

秩父宮會では、本書籍の復刻に際し、当初より会として推薦を付し、その実現に向けて努める傍ら、旧秩父宮家宮務官である山口峯生様を通じて、本書籍の宮中への献本について申し入れたところ、快諾の御事と成り、去る十月三十一日、井上久会長並びに蘭田稔秩父神社宮司により、宮内庁侍従職・東宮御所をはじめ、秋篠宮・常陸宮・高松宮・三笠宮・桂宮・高円宮の各宮家への献上が叶いました。既に天皇皇后両陛下には、秩父宮殿下の薨去五十年に当たり、本年五月二十九日に豊島岡墓所へ行幸啓の上、ご参拝遊ばされていらつしやいます。その御名を通じて縁りの深い当秩父地域において進めて参りました記念事業が、聖上に達しましたことは洵に恐れ多いことと存じます。

これも偏に秩父宮両殿下のご神慮によるところと拝し、今後とも両殿下のご遺徳を末永く顕彰して参る所存です。

◆ 宮司、神社界代表で
カザフ宗教会議へ

蘭田宮司は、去る九月十九日に韓国の仁川国際空港経由で中央アジアのカザフスタンに海外渡航し、国際会議に参加して一週間後の二十六日に無事帰国しました。カザフスタン共和国政府が主催した「世界伝統宗教指導者会議」から正式の招聘を受けて、神社本庁が代表団を結成し、本庁理事でもある宮司が団長を拝命して出席したものであります。日本からは全日本仏教会にも出席の要請がありましたが、神社本庁だけが代表団を派遣し、アジアでは他にインドとモンゴル、中国からヒンズー教、仏教、道教の各代表団、ヨーロッパと中近東からキリスト教各派、イスラムの各国指導者たちにユダヤ教の代表団など計十七団体がカザフ国の



新首都アスタナに結集し、互いに世界平和への貢献を提唱し合い、それぞれの作法で平和祈願祭を執行して共に世界平和への協調を誓い合ったとのことであります。

蘭田宮司ら一行は、まずカザフ国南部の旧首都アルマトイに到着後、同国外務省高官の出迎えなど国賓並みの待遇を受けながらも、最初に戦後日本人将兵のソ連抑留による同地での強制労働で無念の落命をされた数百人を埋葬した墓地を訪ね、持参した日本酒と米と塩を供えて、せめてもの心をこめた慰霊の参拝を果たしたことが特筆されます。

二日間の会議では、カザフ国ヌルスタン・ナザルバエフ大統領が議長をされて各代表が順に演説をし、宮司も二日目に神道を中心に神仏共存ないし融和の伝統を紹介する講演（本号掲載）をしました。前日の大統領との単独会見をはじめ、期間中の内外記者団との対話やテレビ・インターネットなど多忙をきわめました。最後にカザフ族伝統の移動天幕ユルトでの神式の平和祈願祭を執行し、大統領が見守るなか各団体代表の記念署名にも参加して有意義な日程を終了しました。

なお宮司によると、イスラム圏でのこの種の会議は初めてのことで、パレスチナなど中近東諸国のユダヤ・キリスト教とイスラムとの深刻な相剋を和らげるためにも今後三年に一度開催される同会議は重要、たとこのことであります。

盗難守護の妙見様

夜祭の神様としての妙見さまは、北辰北斗の神格化と同時に必勝の神から養蚕や実りの神としての信仰をあつめてきました。しかし、古く奈良時代末から平安時代初期に成立した「日本霊異記」という書物には、一例として、次のようなお話が残っています。

「紀伊国安諦郡に住んでいたある男の家から、十数枚の絹が盗まれた。大変貴重な品なので妙見さまに取り戻すことを祈願した。一方盗まれた絹はすでに市場で売られていたが、不意に強風が起り鹿が現れ、絹を身にまとった衣をひるがえし南に去っていった。やがてその鹿は、絹を盗まれた家の庭に降り立ち、主人に絹を戻し天に去っていった。」



いて考えた時、其の答えはどうも北極星にあると思われまます。北極星の精を受けた霊獣が「麒麟」という鹿の一種であるという説から、「麒麟・鹿」北極星妙見という関連をみる事ができます。また、この妙見を信仰していた武家の家紋に「秋の雄鹿・雌鹿」を用いた氏族があったとも伝わっております。

もともと「妙見」（みょうけん）とは、妙（たえ）に見（あらわす）という意から、盗難や紛失物を見いだす性格をあらわしていたと思われまます。

そう言えば、当社の社殿手前の拝殿の「木鼻」には左右「あ・うんの麒麟」。また社殿一番奥の本殿脇の「脇障子」には「秋の雄鹿・雌鹿」が彫刻されています。このことは、今以ってこの極めて重要な社殿の南北の位置を、妙見すなわち北極星の精の霊獣によって災難から守らせているように感じてなりません。



梟だより



◆映画「草の乱」撮影のこと

10月25日当社境内において、秩父事件を題材にした映画「草の乱」の撮影が行なわれました。

明治17年11月 生糸の暴落などにより深刻な経済不況に陥った農民たちが引き起こした農民一揆「秩父事件」。



当日は加藤織平役の俳優杉本哲太さん他、総勢800名のエキストラが参加し、山征二郎監督のもと、おおよそ9時間も撮影が行われ、開は来年秋の予定。

◆秩父神社妙見講

自 平成十五年 九月
至 平成十五年十一月

九月 七日 川口三栄講
金子秀行講元外三十九名
九月十四日 小鹿野講
小菅健夫講元外百五十六名
九月十四日 中村講
高橋信一郎講元外四百二十六名

九月二十一日 上町講

松本眞一講元外二百三十二名

十月三日 荒川妙見講

浅海忠講元外七十六名

十月五日 上宮地講

今井永保講元外二百五十五名

十月十九日 野坂講

新井永保講元外二百十九名

十月二十四日 東町講

出浦義雄講元外二百二十四名

十一月十四日 番場講

宮野前方也講元外百十名

この度平成十五年より新たに秩父神社野坂講が発足し、新井永保様が講元に就任されました。

また、荒川妙見講の講元に浅海忠様、上町講の講元に松本眞一様がそれぞれ就任されました。今後共どうぞ宜しくお願い申し上げます。

◆柞乃杜神前結婚報告

七月より神前結婚の挙式を挙げられた方々を、紹介致します。

寄居町末野 吉田庄一・ゆう子様
秩父市中村町 木田文仁・恵美様
大滝村大滝 岸野哲也・由紀子様
秩父市中宮地町 田鹿実・尚美様
イングラント アリス・ミエ・ミエ

東京都目黒区 大澤晃・佐和子様
所沢市林 新井賀則・素子様
秩父市時田 新井博文・千瑞様
イングラント ギャレル・曉子様
横瀬町横瀬 山口浩・美緒様

未永く幸せなご家庭をお築き戴きますようお祈り致します。

◆ 節分追儺祭のご案内

往古より二月三日の節分に厄除けや方位除けの祈願を受ける人は数多く、これは節分を境にして人の運氣や年回りも変わるとされてきたことから、厄年の人の身に及び来る諸々の災難や病魔を退け、一年間を無事に過ごしたいという庶民の切なる願いに由来する伝統行事なのです。

当社の節分祭は「奉幣行事」「撒豆行事」「藝目行事」更に「鬼やらい行事」と、いにしえの儀式を今に伝える由緒正しい祭事です。厄年に当たる方は勿論のこと、多くの皆様にご参拝を戴き、厄除けや方位除け、またお車の交通安全のご祈願などをお受け戴きますようご案内申し上げます。



平成十六年 甲申歳 方位吉凶早見

● 本年の厄年 (この前後の年が前厄・後厄に当たります)
 男性 昭和55年生まれ 25歳 昭和61年生まれ 19歳
 昭和38年生まれ 42歳 昭和47年生まれ 33歳
 昭和19年生まれ 61歳 昭和43年生まれ 37歳

◆ 祈願初穂料

- 一、金五千元 特別祈願大神札・一升福増・特製供物授与
- ※ 年男・年女の皆様の豆撒き奉仕も承ります。
- 一、金三千元 祈願神札・五合福増・供物授与

◆ 交通安全祈願初穂料

- 一、金二千元 交通木札 (記名)・梟ステッカー・供物授与
- ※ お車のお守りも節分を節目に改めましょう。

◆ お申し込み

地域のお世話人様を通じてお申し込み戴くか、直接当社にお申し込み下さい。
 その他、ご不明な点などございましたら社務所までお問い合わせ下さい。

節分大福引大会の開催

当りの福品計一〇〇〇点!

■ 2月3日 (火) 10時~15時

年男・年女が撒く福豆の中から見事に福引券を射止められました方には、漏れなく福品を差し上げます。

協力 株矢尾百貨店

「よく見て」「よく聞いて」「よく話す」 お元氣三猿

当社本殿西側には、大変珍しい彫刻があります。写真のように、三匹のお猿さんが「よく見て・よく聞いて・よく話す」という仕事で彫刻され、日光東照宮の三猿のまったく逆さまのお猿さん。

俗に『お元氣三猿』と親しまれ、最近特に注目を集めております。

目を見開く猿は、『魔』が去る。

耳を欽てる猿は、『迷い』が去る。

口を開く猿は、『病・災』が去る。

とも解釈できるかもしれません。

其れはともかく、今や人生百年とも言われる時代、来る平成十六年甲申年も皆様が明るく元氣にお過ごし戴けますことを祈念しこの度『お元氣三猿』の絵馬を整えましたので、ご案内申し上げます。



お元氣三猿

編集後記

■平成15年癸未歳の例大祭「秩父夜祭り」(妙見市)を迎え、ここに社報「柞乃杜」第28号をお届け致します。

今年の夏は、冷夏にみまわれ様々な方面に多大な影響を及ぼしました。

■なかでも、農作物への影響は大きく、日照不足と低温による収穫量の減少や品質の低下など全国から被害状況が報じられました。また、それに追い討ちをかけるように、農家の方々が丹精込めて育てた作物を、収穫直前に窃盗するという大変卑劣な事件が全国各地で発生し、何とも情けない世の中になってしまったものだと悲しさや悔しさから怒りが込み上げてまいります。

■この度の社報の中でも、妙見さまが、窃盗や紛失物を見つけ出す御力があることを申し上げましたが、このご神徳にあやかっけて来る年が実り多い事と、苦勞が報われ守られる社会となりますことをお祈り致します。

※本報の用紙はグリーン・ユトリロマット100の再生紙を使用しています

平成十五年(二〇〇三)十二月三日
 編集 秩父神社社務所
 発行 秩父神社社務所
 〒366-0044 埼玉県秩父市番場町一三
 TEL 〇四九四二二一〇二六二
 FAX 〇四九四二四一五五九六
 印刷所 有限会社 絨文社印刷所
 〒366-0044 秩父市東町二七一八